



## 社会関係の暗号を解読する

丹辺 宣彦（社会学）

高校生の皆さんは「社会学」といっても課程にはないのでイメージをもちにくいかもしれません。私も興味をもつようになったのは大学に入って講義を聴いてからでした。有名なドイツの社会学者でM. ヴェーバーという人が、社会学は「価値（観）」をもった個人どうしの複雑な関係を扱うところに独自の特徴と難しさがあるという議論（方法論と呼ばれています）をしているのですが、その難解さと面白さになぜかひきつけられました。

その後いろいろなことに興味をもち、「集合行為のジレンマ」と集団形成の問題が自分の大きな研究テーマになっていきました。やさしく言うと、これは「大きな集団では、みんなのためになることは誰も進んでやろうとしなくなる」という一種の定理で、合理的利害を重視するとそうなることは証明されています。自分の部屋や家の掃除はする人でも、なかなか公園や街路の清掃まではやろうとしないですね。しかし、社会が大きく変わるときには、なぜかこの集合行為のうねりが大規模に自然発生して秩序を変えていきます。ここでは人々の「価値（観）」の変化や「絆」、格差の存在が重要な役割を果たします。ここに社会学の出番があるわけで、難しいながらも面白い理論的課題群がいろいろと生じるわけです。

現在は実証研究にも力を入れています。豊田市、刈谷市をフィールドにして、自動車産業の立地が、住民の生活と地域コミュニティの構造にどのような影響をおよぼしているのか調査しています。この地域には、企業人の中老年男性が活発に地域活動（これも集合行為です）に参加するという面白い特徴があり、調査しながらその謎を解いているわけです。

とりとめのないことを書きましたが、人の集まりが引き起こすいろいろな問題や謎に自由に取り組んで解読するのが社会学の魅力です。皆さんも一度学んでみませんか。



調査地の豊田での一コマ（左側が筆者）

## 美術作品をめぐる旅

研究室名：美学美術史学研究室

「美術史」って何を研究するの？ 中学校や高校で「美術」の授業はあったけれど、一体何が違うのだろうか？ 皆さんの中にも疑問に思う方がいらっしゃるかもしれません。

美術史学の研究対象は多岐に渡っています。油絵や屏風といった絵画作品や、仏像なども含む彫刻作品、陶磁器や蒔絵のような工芸作品などがその中心です。また一人の作家による複数の作品を取り上げ、作風の変遷を研究対象とすることもあります。



西本願寺 唐門見学

また美術史研究では、何よりもまず研究対象を「見る」ことが重要とされています。作品の主題や制作の動機、あるいは作者の生涯や思想を調べることも大切です。しかし「何が、どこに、どのように表現されているのか」を丹念に確認し、自分の目に見える作品の姿を自分の言葉で叙述することが重要なのです。この手順は「ディスクリプション」と呼ばれ、美術史研究の基礎となる重要なプロセスとして考えられています。

もちろん研究室でも「作品を見る」ことを大切に考えています。自分の研究対象だけではなく、幅広い分野の作品を実見する場として、年に2回の実習旅行が企画されています。遠方の美術館を訪れたり、寺宝や秘仏を間近で拝見したりと、研究室旅行ならではの貴重な体験ができることも魅力です。

美術史研究は「見る」ことから始まります。丹念なディスクリプションから、制作背景や隠された意図が浮かび上がることもあります。作品の向こう側に何があるのか、どんな世界が広がっているのか、いわばその謎を解き明かしていく道筋こそが「美術史」と言えるのかもしれませんが。皆さんも作品を巡る旅に出てみませんか？

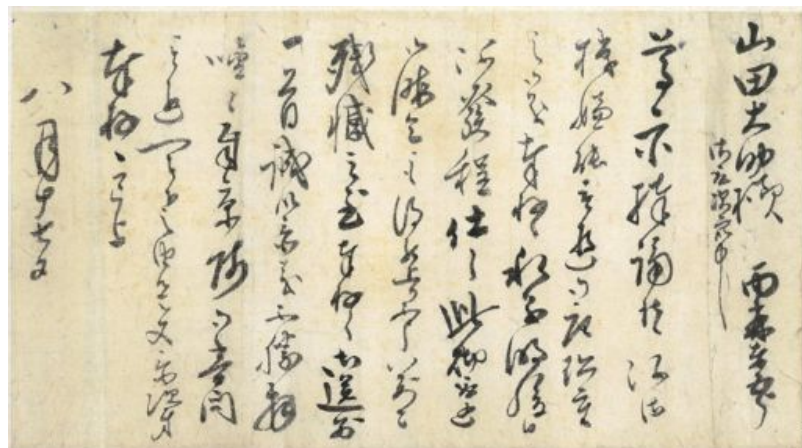
[山口 由香（博士課程前期課程1年）]

研究室紹介—File08

## 見ぬ世の友を求めて

研究室名：日本文学研究室

これは雨森芳洲あめのもりほうしゅうという江戸時代前中期の儒学者の手紙です。芳洲は対馬藩に仕え、日本と朝鮮との外交の現場で活躍した人でもあります。まずは筆蹟を味わってみてください。どうです、闊達な（のびのびした）運筆でしょう。手紙には明後日、江戸を出発して対馬に帰国することや相手からもらった送別の漢詩に対するお礼が書かれています。短い手紙ですが、その内容から享保十年（一七二五）、芳洲五十八歳の手紙とわかります。江戸時代のことは、調べたらだいたいわかるものなのです。



雨森芳洲の手紙

宛名の山田大助やまのだいすけというのは麟嶼りんしゅうと号した江戸の儒学者で、この年にわずか十四歳でした。江戸時代きっての神童として名高い人で、この前年の享保九年に何と十三歳で幕府の儒官となっています。しかし、いかに優秀とはいえ、今の中一ぐらいの少年に対して、ずいぶん丁寧な手紙の書き方をしていますね。それは、誰に対しても誠意のある態度で接した、芳洲の立派な人柄を物語っているように思います。

日本文学研究室で扱うのは、いわゆる文学作品だけではありません。このように人間性に直接迫るような文献もあるのです。日本には先人の配慮によって、書物や文書がたくさん残されています。それらを味読して、古人に友を見つけること、そんな人間にしかできないいなみを、日本文学研究室では重視しています。

[塩村 耕]

最近の文学部

## フレッシュな2, 3年生

新しい年度が始まりました。本紙が発刊される頃には文学部も新しい1年生を迎えているはずですが。とはいえ、学生がどの専攻（研究室）に進むのかを決めるのは、1年生も後半になってから、文学部で専門の授業を受講し始めるのは2年生から、3年生になってようやく文学部へ進学、というような段階があります。というわけで、各研究室は今の季節、フレッシュな2, 3年生を迎えているところです。（U記）